

令和7年度 泉大津市立図書館協議会

■第3回会議の議事録

日 時：令和8年1月26日（月）午後6時00分～午後7時30分

場 所：泉大津市立図書館オープンセミナースペース

出 席：嶋田会長、阿児委員、岡本委員、澤谷委員、谷合委員

公開の有無：公開

議 事

（1）新図書館評価について

（2）「キミと、よみドキっ！」2期目ワークショップについて

河瀬:

令和7年度第3回泉大津市立図書館協議会を開催いたします。

本日も出席の委員を五十音順にご紹介いたします。

阿児雄之委員。岡本真委員。澤谷晃子委員。リモートで嶋田学委員。谷合佳代子委員。高島委員はご都合により欠席とご連絡いただいております。オンラインの嶋田議長は泉大津市立図書館協議会要綱第5条により出席となります。

事務局を務めます図書館長の河瀬です。よろしく願いいたします。議事進行につきましては嶋田議長にお願いしますが、議長にも議論に積極的にご参加いただきますようお願いいたします。また会議記録および公開のために録音録撮影をさせていただきます。

それでは、嶋田議長お願いいたします。

嶋田議長:

議事一つ目、泉大津市立図書館の新図書館評価について事務局よりご説明をお願いいたします。

河瀬:

協議会では、継続して図書館新評価についてご議論をお願いしております。年次報告書で今まで使っておりました基準では、目標を達成してもできて当然の B という考え方で 130% 以上を A、70~129% を B、69% 以下を C と 3 段階にしておりましたが、市の他の計画等々と基準を合わせた方がよいため、新基準 ABCD の 4 段階にすると前回ご意見として頂戴いたしました。

そこには、A は目標以上、B は順調、C は概ね順調、D は要改善ということではっきりした数字は書いてありませんでしたので、今回は 20 パーセントごとに再度、ABCD の評価を入れております。

開館しました 2021 年から 2023 年までは開館前に入れた数字でございましたので、なかなか現実とはかけ離れた数字になっておりましたが、2024 年は図書館が動きながらの数字でしたので、現実には即した評価・目標になっていたのではないかと思います。それをもとに 4 段階に書き換えましたら、このような結果になっております。これを基に、ABCD の 4 段階の評価に修正をさせていただいてよろしいでしょうか。また、前回の協議会で岡本委員から、5 年たって評価の基準を見直し、新しい年次報告書にするのがいいのではないかとご意見いただきました。阿児委員からは講師の方にアンケートを取るとのご意見をいただきました。くわえて、昨年度皆様にいただきましたように、図書館でどのようなものが生まれたかというストーリーをいただくことを 2026 年度分の年次報告書から採用したいと考えております。

変更する評価項目は、図書館らしい数字の評価ではなく、市民にわかりやすい泉大津市立図書館らしい評価ができればと思っています。文科省のこれからの図書館のあり方に即した形で当てはめていったものと、泉大津市図書館整備基本構想に書かれているものを総合し、活動の部分は数字として出すことができるようなもの、サービスの部分はそれぞれ利用された方にストーリーで評価いただくというような二つに分けた評価の方法を考えました。来年度以降も継続的にご審議いただきたいと思います。今日の時点でのご意見を頂戴できればと思います。よろしく申し上げます。

嶋田議長:

説明ありがとうございました。それでは皆様いかがでしょうか。どなたからでも結構です。まずは前回の会議に基づいて 4 段階評価に改めてくださったというところで、実際に数字が出て、新基準による評価のあり方、妥当なところになっているかというところです。皆さんもおそらくそうかと思いますが、目標の設定の仕方というの、評価基準 4 種類ということとともに、あらためて見るといくつか気づくところもあります。そういった観点からもまた見ていただければと思います。

阿児委員:

事実確認で一つよろしいですか。新基準は目標以上が 100%以上、順調が 80 から 99%ですね。

谷合委員:

基準がすごくわかりやすくなって、特に 100%以上が A で良かったなと思いますが、そもそも目標値というのが、対前年度より絶対上がっています。蔵書数だけは 2023 年度と 2024 年度一緒ですけど、見る限りほとんど上がっている。その目標値が妥当なのかというところも評価しないといけないのではないかと思います。無理やり目標値を掲げて達成できなかったから駄目というわけではないでしょう。今更ですが、以前の評価が 130%以上で A というのが高すぎるのではないかという意見だったのですが、目標値そのものをなしにして、対前年度比だけで見たら 130%以上で A というのは、そんなに無理なことでもないかと思いました。4 年分並べてみると、年間入館者数の目標値が 10 万から 25 万 30 万 40 万とすごい勢いで伸ばしておられます。最初が半期なので、これはしょうがないとしても、ほとんど達成しておられるからすごいと思いますが、目標値をどう設定するかというのは、かなり慎重にしないとイケないのだろうという気はしました。でもよく頑張っておられるのはこれ見てもわかるので、全体としては良かったなという感想を持ちました。

嶋田議長:

ありがとうございます。私も同じこと思いました、2023 年度の来館者 36 万 6000 人から 2024 年度 39 万と 3 万人増えているのに、評価は 98%で B です。これは目標設定が 30 万から 40 万というふうに 10 万人上がっているのに、新基準においても B 評価ですけど、明らかに A でいいというような伸び率です。谷合委員のご指摘のように、目標値の算出方法というのは例えば前年度から何%伸ばすというようなことを想定されているのか。館長にこの設定の基準、考え方をお聞きしてみたいと思います。

河瀬:

開館前は、旧図書館の何でも倍という設定です。全然想定ができなかったもので、全てにおいて 2 倍にしていくという形で数字を入れています。2024 年度、2025 年度もそうですけども、見直すときに、ちょっと高い目標といいますか、おっしゃっていただいたように高すぎる場所もあったかと思いますが、来館者数は 36 万人になっていたの数字を刻まらずに翌年は 40 万人へという少し大きな数字を入れています。

嶋田議長:

2001 年の公立図書館の設置および運営上の望ましい基準が出た後に、日本図書館協会から運営手引きでしたか、貸出上位 10%の平均をとったもの人口階層別に並べて、それを目標に

するとか、もしかしたらご検討なさったかもしれませんが、そのような考え方もあるのかなと思いました。

谷合委員:

市の人口7万人ですよ。年間40万人入館されていますよね。これは本当にすごいと思います。

岡本委員:

やはり今議論に出ているように、目標値の設定方法を少し区分した方がよいと思います。泉大津ですら人口減少はかなり明確な傾向となっているだけに、ベース人口が減っているけれど利用者が増えているのは、むしろ倍々ぐらいの結果を出しているということになると思います。人口が上昇している自治体なら別ですけど、人口減のトレンドが変わるということはほぼこの先ないので、その人口に紐づく数値に関してはこういう考え方をすると、一方で蔵書に関してはこう考えるというふうに、少し数字の捉え方、考え方を整理した方がよいという気はします。蔵書も気をつけたいのは、増えていくものってしすぎると図書館でよくあるのは結果的に除籍しなくなるという問題があるので、持てる蔵書がどの程度きちんと健全に入れ替わっているかのような数字を入れた方がよいと思いました。次回以降の目標値設定ももう少し議論した方がよいと思います。

阿児委員:

岡本委員の発言にも少し関連しますが、私は図書館分野ではないので、委員の方でご知見あれば教えていただきたいです。この数値と数値の関連性みたいな分析というのはあるのでしょうか。例えば、イベント実施数と参加者数の関係性、1回あたり何人ぐらいを目標にするのかっていうものがわかると多分目標値設定もできると思います。イベント回数が増えれば、参加者数が増えるのか。たぶん相関関係があるような数値もあるでしょうし、蔵書数と回転率っていうのはどういう関係性であるのが望ましいとか、何かそういう数字1個1個はもちろんのこと、数値同士の相関関係の分析、例えば図書館運営に関して研究の成果があれば、引用することはできるのでしょうか。本当は専門的な委員であれば、提示しないといけないところでの質問になってしまって恐縮ですが、委員の方でそういうご知見があれば教えていただきたいと思います。

嶋田議長:

例えば泉大津市の場合は、イベント数が非常に多岐にわたって回数も多い。これはレファレンス件数との相関性というところ関連するだろうと思われれます。それから蔵書回転率が高ければいいかというところ必ずしもそうではなく、単純にニーズの強い資料への傾斜配分的な購入があれば、回転率は当然上がるわけです。多様な資料を標準的入門的なものから専門的

なものまで幅広く揃えても必ずしも貸し出しには出ない。参照読書やレファレンス参照に終わるものもあって回転率が上がるとは限らない。そのことから考えると、分類別貸し出し回転率のその多様性、例えば何回転以上の3桁分類のポイントが何点以上あるとまんべんなく利用されているというようなことをケーススタディ的に見ていたので、日本の評価研究の中で私が調べた範囲ではその主題別の回転率で評価できるかという研究はおそらくなかったと思います。低くても対応する数値が補完するというか、必ずしもそれが悪いとは言えないということです。

もう一つは、開架冊数における新刊受け入れ図書の数というものが望ましい基準の運営の手引きにありまして、開架10万冊のうち、どの程度が1年以内に購入された本かということと大体1割ぐらいです。

澤谷委員:

この数字がどうやって出てきたか、そのインプットの条件がわかるとそれを評価するものが見えてくるかなと思います。それをうまく組み合わせると、例えば先ほどの少なくとも意味がある数字とか、多い方がそれに意味があるということがわかるのではないかと思います。もう一点は、今は単年度で見ていっていますが、ゆくゆくは長期で見ていくことができた方がよいです。必ずしも右肩上がりではないと思うので、年度を追うごとにBになるというのは絶対あります。数字が上がらなくても、きちんと評価できるということも出てくると思いました。

嶋田議長:

ありがとうございます。

短期的なトレンドと中長期的なトレンドで評価する項目の整理ということですね。

岡本委員:

そういう意味では改定するにあたって、捉え方を全文記載しておいた方がよいと思います。数値評価は健康診断と同じなので、上がりも下がりもしてないことがいい数字ということも十分あると思います。右肩上がりであったり右肩下がりであったり、むしろ変動が発生しないことをよしと捉えることも必要で、いずれにしても数値に関しては、この一長一短ある上下動にあまり左右されず惑わされずに、5年間を評価期間の一つの区切りとするなら5年間のトレンドの中でちゃんと見るようにしましょうということをしかりと示しておいた方がよいと思います。いずれ館長や役職者も変わっていくので、そのときに捉え違いをしないようにしたいのと、こういうデータを参照して議員さんが議会で質問していただいたりするとありがたいと思いますが、そのときも数字が独り歩きしないように数字の捉え方はこういうものだよという前文を付け加えておくようなやり方をした方がよいと思います。

嶋田議長:

ありがとうございます。今、岡本委員がおっしゃったことで私もインスピレーションが湧いたのが、貸出冊数とか来館者数とか実利用率とかありますよね。表の中で表現するのは難しいかもしれませんが、こういった部分が高ければ、どういうベネフィットが住民にもたらされているのか、こういうようなところが少し懸念されますというような、数字が持っている意味をちゃんとわかりやすくできるのではと考えました。やはり一般の方にはわかりにくいです。実際それは私も感じました。

今、いくつか課題というか今後検討すべき点もご意見いただきましたし、館長からもありましたように2026年度はこの評価項目、質的のところも含めてストーリー評価というところにチャレンジしていくということですので、引き続きまた協議会等でご議論をいただければ嬉しいなと思いました。質的評価のところについては、どういうところがその評価の視点になるか。光の当てどころになるかということも、ワークショップなどで市民さんから満足度を聞き取りするということもあると思います。どんなところを評価したいとか、通信簿をつけるとしたらこういうところに目をつけたいというような、そのポイント自体もワークショップでやっていこうという、そういう想定もあるということでしょうか。

河瀬:

前回、高島委員のご発言にありました「市民の方と一緒にこの評価をしていく」。評価項目を考えるのは難しいかもしれないですが、ワークショップをするというのは考えております。

嶋田議長:

ありがとうございます。我々が仕事をしている内部の視点では主に使わないようなところを見ているのかというようなことも、何か聞けるといいなと思ったもので発言させていただきました。

このテーマについては、ほかにご意見はないということでよろしいでしょうか。

ありがとうございます。それでは、議事2つ目の「キミと、よみドキっ！ 2期目」ワークショップについて事務局よりご説明をお願いいたします。

河瀬:

「キミと、よみドキっ！」泉大津市子供の読書活動推進計画の第1期は、2024年度から2026年度までです。特徴としては、子供たちが市民の1人としてきちんと意見を言ってくれるワークショップを行った、市役所関係各課が協力してくださった、漫画3ページで構成をしたという3点がキミドキの特色だと思っておりますので、そのままで進めさせていただきたいと考えております。

来年度、作成していきますが、キミドキ第1期2025年度の評価会が会場の都合等ありまし

で開催できておりませんので、キミドキ第2期のワークショップも兼ねて開催するのはどうかと考えています。来年度第1回目の図書館協議会で、この評価会+ワークショップというのは欲張りかもしれませんが、子供たちも入ることですし、その評価を踏まえて次の計画をするという流れで話ができたらと思っております。

上位計画の第2次教育振興基本計画が2025年度から2028年度までです。生涯学習推進計画が令和9年度策定されるので、目指すところがずれないようにしながら計画を作っていくと考えております。皆様に今日ご協議いただきたいのはその時期です。来年度と言いながらやはりいろんな会議にかけていかなければなりませんし、作る時間も必要ですので4月から6月までの間ぐらいでワークショップを行いたいと思っております。また、去年の評価会は、小津中のメディアセンターをお借りして行いましたが、ワークショップはシープラで行いました。より多くの子供たちが参加をしてくださり、より多くの市民の方がその様子を見てくださるためにはどちらがいいかということと、子供からの意見聴取の方法は、前回のような感じでフランクに話を聞いていくというスタイルでよいかについてご意見をいただきたいと思っております。前回の計画で気になったのは、図書館に来てくれた子供たちに話を聞いたので、図書館に来ることができない、物理的にというよりも、何らかの事情があって来ることができない子たちにも聞く手段がないかというのをずっと考えておりました。教育支援センターはすごく近い関係性になりましたので、そういったところや子供食堂などにも出かけていって意見聴取ができればと思っております。

嶋田議長:

ありがとうございます。今、館長からスケジュールのことも含めてご案内いただきました。皆様からご質問やご意見を願います。

谷合委員:

確認です。この教育振興基本計画が一番基盤ですよ。

子供の読書活動推進計画は、生涯学習推進計画の下に位置する。で間違いはないですか。

河瀬:

はい。

嶋田議長:

先ほど館長から、できるだけたくさんの子供たちということで参加のハードルを下げる多様な、学校というところに限定しないというご提案もありました。例えば、図書の時間に学校司書さんから子供たちの声を聞くようなひとコマを作るというのは難しいでしょうか。それをやると、かなり多くの子供たちの声を聞くことができると思いますが、どのように学校司書さんにやっていただければいいか。あるいは学校でそういった図書の時間を、計

画の意見聴取に使ってもいいと言ってもらえるかという大前提があるわけですが。泉大津市の子供読書活動推進計画については社会教育の領域だけではなく、幅広い行政部署の皆さんにも参画していただいて本当に画期的な取り組み方法だと思うんですけども、そういう意味ではその学校司書さんなり学校でのっていうところがどうかと思ったものでご質問させていただき次第でございます。

河瀬:

ありがとうございます。何でも図書館がやらなければと思っていたので、学校司書にお願いするという発想がありませんでした。相談してみたいと思います。ありがとうございます。

阿児委員:

すごく難しいなと思ったのが、積極的な子供さんもいるし、発言したいけどちょっと言いづらいという子供さんもいるし、家庭の形もある。例えば家族で参加できるというのもあった方がいいのかなと思います。例えばご家族で参加できるワークショップとか、オンラインでちょっと顔を隠しながらとか、対応はリアルタイムにするけれど対面ではない形だと参加しやすいお子さんもいるのではないかと思います。そういう安心感的なところを確保する開催も、もし、やり方としてあるのであれば、教育センターさんとかそういう方々と協力して、何か企画してみるのもいいと、お話を聞いていて感じたところです。

岡本委員:

私もやはり阿児委員が言われたのが一番現実的にいいのではないかという気がしています。子供は、基本的に端末を使えるというのは前提だと思います。GIGA スクールの端末も持っているし、ご自身のものを持っている。だから、特定のいわゆる選択的不登校の子に聞こうとかターゲットを絞りすぎるのは少し悩むところがあります。それよりは、対面でなくても構わず、あなたがどこの誰であるかという秘匿性を重視しながら、広く聞くようなスタイルがいい。特に泉大津の場合、行政区域が小さいので、対面した場合にあなたがどこの誰であるかがほぼ特定される環境にあると思います。それが泉大津市の良さの部分もあります。けれどそれを非常に自由に振る舞いづらいつらいつら感じているお子さんも必ずいると思います。そうすると、オンラインでどうやって敷居を下げるかっていうのを考えたい。館長にお伺いしたいのですが、泉大津でオンライン意見反映フォームみたいな仕組みはありますか。

河瀬:

あります。

谷合委員:

こういうときに高橋先生がいらしたらいろいろ聞けたのに、ちょっと残念です。オンラインも一案だなと思いましたが、どうやって周知するかが問題ですよ。それは何か館長には腹案なり、私案を持ちでしょうか。

河瀬:

前回ワークショップをやりましたって言ったときは、小中学校に募集の紙を配布しました。全く反応がなかったので、シープラに来ているけれど本は読んではいない子、放課後にお友達と遊びにきている子たちをお願いをしたり、その子にお友達を連れてきてってお願いする形で実施しました。でも、それで広く聞いていることになるのかなっていうのがモヤモヤと残っていました。こうなったら図書館を出てインタビューに行くのいいのではないとか、また同じようにワークショップをしても、参加したいですっていうキャラクターの方だけが集まってしまうと、そこに消されてしまう意見があるのではないかというのが引っかかっていました。阿児委員がおっしゃったようにオンラインで発言ができる場所を作るというのはすごくいいので、学校を通じてとか、教育支援センターを通じてという形でどこか機関を介すると届く情報かなと思います。

澤谷委員:

子供たちに、広く意見聞きたいんだけどどうしたらいいって聞いてみるのはどうでしょう。たぶん私たちにはないアイデアを持っているのではないかなと思います。その積極的な子にワークショップを作る側になってもらう。子供たちにワークショップを作ってもらって、どういう意見を求めたいかみたいなのと一緒に相談してもらうとかすると、何か我々が思い及ばないことが出てくるかなと思いました。

嶋田議長:

ありがとうございます。私も網羅性というところから少し離れるかもしれませんが、ジョブチャレンジありますよね、職場体験。中学生の皆さんにアクティビティの一つとして、この図書館がどんなふうに使われているか、どんなふうに見てもらったらいいかっていうことを何かテーマにさせていただくとか。いま澤谷委員がおっしゃったようなことと言うと、ワークショップのデザインを考えてもらう実行委員会みたいなのを瀬戸内でもやったんですけど、図書委員の人が結構多かったんですね。どういうふうに声掛けするかっていうときに図書館に関心のある人だけ集まっちゃうっていうのはあるかもしれないですけど、逆になかなか集まらないかもしれないというときに、図書委員さんっていうターゲティングもありかなと、今お聞きして思いました。

幅広く声を聞いていくときにいろんなご意見を出していただきました。館長、皆さんにお聞きしたい事柄で、今出てきたような内容以外のポイントというかこういうところも具体的に意見を聞いてみたいというようなことがもしありましたらおっしゃっていただければと

と思いますがいかがでしょうか？

河瀬:

はい。ワークショップの手法が前回同様でいいのかなっていうのは思っていたんですけども、澤谷委員がおっしゃったように、子供たちにワークショップのデザインからやらせてもらうとなると、この場で結論を出さなくてもいいかなと思っています。あとはすいません、時期の問題だけです。図書館協議会の皆様には、ワークショップにはご参加いただきたいというのと、2025年の評価会も一緒にやりたいものですからその辺ちょっと実現可能かも含めてご意見をお聞かせください。

嶋田議長:

今のお話だと、どのように評価していくかのワークショップという前提になる議論ということでしょうか。それはタイミングが合わせられる気がしますが、実際に評価をしようっていうワークショップと2025年の評価会を4月6月という枠組みだとして行うとすると、全体の尺の時間ということもありますけどアイデアが出揃うような準備ができるのかなというところが少し何か不確定というか、不安があるかなと思います。

谷合委員:

私もちょっとイメージしにくいですね。確かにどう同時にやるんですかっていう。その子供たちにワークショップをやらせてもらうというのはすごくいいと思うんですけど、その前にいろいろなことを大人の側が落とし込んでおかないといけないでしょ。それはもう図書館側でやってくださるってこと？私達は手を出さなくていいってことですか。

河瀬:

そうですね。委員のみなさんが集合してというのは難しいので、オンライン上でとか相談するのはいかがでしょうか。

谷合委員:

次はワークショップの場に集合してということですね。それなら事前にメールでもMessengerでもやり取りして、とりあえずそれなら何とか行くのかなという気はしました。あとは、ワークショップを自分で作れる子をどうやってゲットするか問題。何かヒントだけでもいいかなと。最近、学校ではそういうのをやるのでしょうか。

澤谷委員:

このあいだの小津のこどもたちは、デザインができそうな気がします。例えば全体を任せるとはなくて、「幅広い方々に聞きたいけど、どういうアイデアがある？」というこ

とを聞くだけでもいいかと思っています。関係を持ってもらうと、たぶんその子たちも自分たちが作ったということにより、深く入っていけるような気がします。

谷合委員：

そうなんですよ。大人のお仕着せじゃなくてね。

嶋田議長：

市内にあるのは中学校3校でしたか？

すでに交流があるのかもしれませんが、例えば小津中に昨年お邪魔して、なんて柔軟で伸び伸びとした意見交換ができるのかと思いました。そこに集まってくださった人たちの特性というのはあると思いますが。

また瀬戸内の話になって申し訳ないですが、市内の三つの中学生がそういう公募に応じてくれて、そこに高校生もいたんです。興味を持ったいろんな学校の生徒が、人数は少なくてもいいので同じテーブルにつけると、アイデア出しやワークショップデザインのヒントをいただくことができるのではないかとということも頭をよぎりました。

いろいろとご意見いただきましたが、他に何かこういうところは、今日のうちに具体的に意見を聞いて、詰められる材料が欲しいというようなことがありましたら、また少しまだ議論できてないことなどありましたらお願いします。

河瀬：

3中学校のうち2校はここから徒歩10分ぐらいのところに学校があるので、図書館内にいる中学生はその2校の子供たちの方が多いのではないかと思います。

ただ、積極的に図書館の何かに関わってもらうということを今までやっていませんでしたので、これを機会にというのはすごくいい取っ掛かりだと思います。

嶋田議長：

意見交換のポイントとして、今のところ浮上してないような要素などもありましたらご示唆いただければと思います。

河瀬：

先ほどもご紹介しました泉大津市教育振興基本計画。この中に図書館のことも書かれていて、シープラを中心拠点として、市全体を図書館に見立てたまちぐるみ図書館の拡充。これは生涯学習課の取り組みですけれども、シープラと学校図書館が連携した子供の読書活動の推進ってところが大きく書かれておりますので、ここに沿うような形で子供の読書活動推進計画を進めていきたいと思っております。

谷合委員:

ワークショップの日時って土日ですか、それとも平日の夕方ぐらい？ どのようなイメージですか。

河瀬:

学校を通じて依頼するのであれば平日かと思います。

それが難しく、個別に参加ということになれば、平日の夜もしくは土日、土日の昼間が子供たちは出てきやすいのではないかと思います。

岡本委員:

日程の話は高橋委員に聞いてみるしかないのではないかなと思います。正直、私もお仕事していて、学校関係を何かやろうというときはかなり難しいと思うんですね。こればかりは、とにかくお話してみて学校側のご協力があった方がいいと思いますし、本市の場合はやはり学校数も限られているからこそ、学校と連動した取り組みはしやすいと思います。ここは学校側に、一番望ましい時期をお伺いするという形しかないのではないかと思います。

例えば、新図書館を作るワークショップをやりますよ、子供たち参加してくださいっていうのは、今計画して来年度来てくださっていうのはまず普通断られるので、その辺も含めてご相談かなと思います。正直、土日は一般的には設定しない方だと思うんですね。土日忙しいので来れる子来れない子に二分される可能性が高いので、そこも含めて高橋先生に聞いてみた方が良くないかなと思います。

嶋田議長:

ありがとうございます。今の岡本さんのお話も私すごく全く同感でして、例えば中学校というところにポイントを落とすのであれば3ヶ所あれば同じ日ってなかなか難しい可能性があると思います。分散的な開催ということ等も致し方ないというか。そのときに協議会のメンバーが必ず全員参加できるかという事実上難しいと思うので、協議会の委員がそれぞれに参加するっていう選択肢も考えておいていいかと思ったりするんですね。そうすると全体会議っていうのができないということになると思うんですけど、もしワークショップのところ協議会の委員も陪席していることを高く価値づけるのであれば、そういう方法論を柔軟に考えておいていいのかなというふうに思いました。

それでは館長、いろいろいただいたご意見を素材に施策の調整といたしましょうか、そういうことは可能でしょうか？

河瀬:

まず、今日皆様からいただいたご意見を高橋先生にお伝えして、また高橋先生のご意見を皆様にお返しするというような作業を近々にやらせていただきますので、よろしくご願

たします。

嶋田議長：

はい、よろしく申し上げます。ありがとうございました。それではこのテーマについて他になければ議案の「その他」ということで、ここからは館長から今回議案をいただいた諮問に対する応答以外に、協議会のメンバーとして、泉大津市立図書館の運営についてご意見を自由に言っていただく時間にしたいと思います。

阿児委員：

一番の評価にも関わってくるのですが、5年間というのを一つの区切りとして評価を見直そうというお話でした。多分、年度目標とともに中期的な目標のようなものが今回のご回答でもあったと思います。前の図書館の数値を全て倍にするというのを5年かけて達成できたのか、次の5年かけて毎年こういうふうにしていくとか。計画を立てていくのはすごく大変ですが、キミドキも3年ですし、何か足並みが揃うような感じがいいのかなと思っています。今拝見しても、いろんな計画の年度がバラバラで、どのように考えていったらいいのでしょうか。例えば教育振興基本計画が2028年度までで、生涯学習推進計画は2026年で3年ごとに見直し、キミドキは3年ごと、評価は5年ごとみたいな感じだと、動きの把握が難しいかなという印象があったので、この辺は徐々には思うのですが、中期的な上の計画とのバランスであるとか、図書館における中期的な計画と単年度の計画とのバランスみたいなのは、そろそろ出せるような形になってきているのではないかなというのを感じているところです。中期的な目標的なところも指し示していただくといいのではないのでしょうか。

嶋田議長：

ありがとうございました。今の阿児委員からのお話に館長からありますか。

河瀬：

泉大津市の中の様々な計画もありますけれど、文科省の子供の読書活動推進計画が第5次計画、私も入っていますが大阪府も第5次計画を策定中です。そこで謳われていることと全く違うのは問題なので、子供の活動推進計画の路線と市が目指すところの路線も外さないというところが、バランスとおっしゃっていただいているところかなと思います。

岡本委員：

これは記録に残す意味でも発言しておこうと思います。これは図書館単体で議論できることでもないとは思いますが、やはり計画が多すぎるという問題を指摘しておきたいと思っています。行政計画は、いわゆるPDCAに基づいて計画を立てるという考え方が依然とし

で非常に主流ですけれど、PDCA という考え方自体が本当に現代において適切なのかということ、きちんと行政機関で捉えて考えられた方が良いです。OODA（ウーダー）ループで計画を立てるといふか計画を回していくことをおすすめしているのですが、図書館としてできることとして、数ある計画をどのように整理していくか、さけるリソースにも限界があるので、どう効率化していくかということもあわせて、今回問題提起していけたら良いのではないかと思います。実際、真庭市立図書館さんは子供読書活動推進計画と図書館の基本計画を一本化するということをやりました。これには嶋田議長も関わられたと思うのですが、最初の何年間かはそれぞれが並走で構わないと思いますし、それが良いと思いますが、年数を過ごしてきたら、物によっては計画として一本化して併合していくということがあって、良いのかなと思います。

嶋田議長:

令和 5 年に国の第 4 次教育振興基本計画が出ました。社会教育関係者に注目されているのがこの基本的な方針の中に社会教育というのがかなり食い込んでいるということです。この教育基本振興計画においては非常に注目すべき点であるという指摘があります。計画のコンセプトの中に、日本社会に根ざしたウェルビーイングというようなことがあります。先ほど岡本委員から計画が多すぎるという話があって、私も全く同感なんですけれど、実は泉大津市は図書館を整備する前の泉大津市図書館整備基本構想以来、図書館全体の計画のようなものはありません。しっかりしたものでなくても、市民の皆さんへの何かメッセージといふか、泉大津市立図書館を何のためにどんなふうにしていくか、すごく短いものでも、キミドキのようにコンパクトなものでもよいと思いますが、国がそういうトレンドとして、われわれから見ても評価できるような部分との整合性も踏まえて、泉大津市立図書館がこれからどこへ向かってどんなふうにしていくのかがあって、いいかを感じているところです。

岡本委員:

計画を増やす気はないのですが、ぜひこの先の展開として、これからのデジタル化をどうしていくかという泉大津にしかできないような取り組みを進める議論をするというのはぜひお願いしたいと思っています。先日、日本経済新聞の報道で、国会図書館のデジタル化がなかなかのペースで進んでいる。全蔵書の 2 割ぐらいまで来たという報道がありなかなかインパクトがありました。この 2 割って一見小さく見えますけれど、実際にデジタル化されているものの個々のタイトルで見ると、この本もデジタル化されているのかということまで入ってきた感じになっています。これからデジタル化されたものどう扱っていくのかというのを考えた方が良くと思っています。これは議論メインのテーマであった、今後の評価にも関わってくると思うんですね。少なくとも資料の点数に関してはかなり大きく関わってくると思われるので、これについても今後本格的に議論をした方が良くと思っています。

ます。

嶋田議長:

ありがとうございます。岡本さんのご指摘も非常に共感するものがあります。ちなみに日本図書館研究会の図書館界という学術雑誌がございますが、2026年1月号のホットトピックスといういろんなテーマで1年間ご寄稿いただく枠で、近年のメディアと情報の動向に対して図書館は何ができるかというテーマで、この領域では第一人者である法政大学の坂本旬先生や伊勢市教育委員会の宮澤優子さんなどにご寄稿いただいています。非常に刺激的な議論になっています。その中で坂本先生は、これからのデジタル時代の図書館の役割として三つ挙げておられまして、一つはデジタルインクルージョンである。これは社会的包摂デジタル社会ということです。そしてデジタルシチズンシップ。これも民主的な社会をつくるときに、デジタルという基盤を抜きには語れないということです。情報メディアとカリテラー教育といったことの上位に位置するとらえ方として、デジタルシチズンシップ。そしてこれらを進めるためのデジタルトランスフォーメーション DX というこの三つを挙げておられます。そういった観点からも、泉大津市の図書館としてどのようにそういった社会的な変化に対応していくかというのは、本当に岡本委員のおっしゃるところです。基本計画、サービス計画というざっくりした包括的な枠組みももちろん必要ですけども、むしろ社会的に重要なアプローチ、切り口ということで柱を立てて、という方が適切かもしれません。今のようなテーマは、澤谷委員は大阪市で精力的に取り組んでこられたお立場から、何かお考えやご意見があればぜひお聞きしたいと思いますがいかがでしょうか？

澤谷委員:

大阪市の場合は、大阪市の上位規定に基づいて、図書館がやっていることを示すというような手法でやりました。計画といっても元々ある計画に沿っていますということを示すというものだったので、それでもいいとは思っています。確認できてないのですが、泉大津がDXの計画をお持ちであれば、そこに紐づいていますということを示すだけでもいいのかなと思いました。

嶋田議長:

ありがとうございます。今、出てきたご意見も含めて、後ほど阿児委員や谷合委員にお聞きしたいと思いますがいかがですが、ここまでで何か館長からございますか。

河瀬:

この協議会の1回目のときにご協議いただいたのが、オリアムデジタルヒストリーの件だったかと思います。これもこのままの形でいいわけではなく、プラスアルファの活用というところを昨年一昨年とご協議いただきました。やはり使ってもうためには、使い方・使われ

方をしっかり発信していくということが続けていかなければいけないと思っています。毎回同じ、毎回学校の授業で使ってもらっただけで終わるのではなく、形を変えて次の展開次の展開と作っていかないと飽きられてしまうと思います。

嶋田議長:

ありがとうございます。今の流れの関連、あるいはそれとは別の切り口でも結構ですが、阿児委員と谷合委員いかがでしょうか。

谷合委員:

先ほど岡本委員から PDCA サイクルは云々という話がありましたが、PDCA サイクルというのは経営管理の概念というか営利企業を回すための考え方であって、典型的な資本主義というか、資本の回転のようところが目玉にあると思います。図書館は公共政策です。だから違う論理で回していくべきだと私も思っていて、そういう点では常に目標値を高く高く上げてそれをクリアしていかないと気が進まないようなやり方は、ちょっと一息ついた方がいいのではないかと。それよりもみんなが働きやすい職場を作って持続可能な図書館運営をというふうを考えていってほしいと思います。

阿児委員:

私としては、計画がいっぱいあるのはわかりますが、関連性がわからないんです。例えばシープラが目指しているのはこういう計画のこの部分ですよとか、市の計画のこういうところですよっていうのを 1 回講座でもらってもいいのかなと思っています。僕ら委員自身が聞きたいです。協議会の 1 回を使って開催するのはもったいないかもしれませんが、「シープラが立てた計画はこういう計画です」と、シープラ自身に語っていただくような機会っていいのではないかと考えています。例えばリアルで参加者が 10 人だけだったとしても、それを動画で残しておいて、いつでも見られるようにするとかですね。そうすると、計画同士の繋がりとか、計画全体の見取り図、さらに泉大津がどういうことを目指していて、その中でシープラはこういうことをしていくんだ、皆さんと一緒にこういう図書館になっていきたいんだっていうのが伝わると思います。そういうのを今までされたことがあるかどうか、私が知らないだけかもしれませんが、ぜひ 1 回ぐらい講座をされてはいかがでしょうか。仕事を増やせばかりで申し訳ないですが、市民の皆さんも関心あるのではないかと思います。

谷合委員:

私もどの計画が上位ですかって聞いたのはそこなんです。公立の図書館の人間じゃないと、その辺が普通の勤が働かない部分があって、市民の皆さんも、そのような計画があると知らないですね。市の行政ってどう回しているのか感覚でしかわからない。ゴミの収集は週 2

回が3回になったらいいなとかそういうのはすぐわかって、そもそもそれはどこが立案してどういう考え方で回しているのかというところを知りたいですね。ただ、非常に堅い話になるだろうという予想がつくので、はたしてそれで市民の皆さんが集まってくださるかというのは、ちょっと不安はありますが、1回やっておくというのは、本当に基本的な考え方を確認するために今の阿児委員のご意見に大賛成です。

澤谷委員:

何か目標とかに、これはこれですよ、これに基づいてやっていますよ、みたいなのをちょっと書いたらいいかもしれないですね。

谷合委員:

確かにわかりやすい。この目標値数字がどこから出てきたのかというのが、もう少し説明できるようになっていたらいいなと思いました。でもちゃんと書いてあるんですね。

澤谷委員:

たぶん役所の人間は、上位がこれで、これに基づいて、これになっているというのはすんなり入るんです。

谷合委員:

わかりますが、なかなかストーンと落ちてこないものがあるんですね。

阿児委員:

キミドキは、漫画で読みやすいんだけど、他の計画などとの関係性がわからないので、見取り図が欲しいんですね。図書館シーブラはどういう見取り図の中で動いているんだろう、どういうことを目指しているんだろうみたいなところ。そうするとその繋がりさえわかれば、一つ一つの資料はすごく伝わりやすい形で作られていると思いますので、それを繋ぎ合わせる。今回の計画もこういうまとまりがあります、こういう繋がりが見える。資料と資料、計画と計画の繋がりみたいなものが、個人的にはすごく聞きたいですね。でも、まさに1個1個は伝わっても、全体性としてはすごく伝わりづらい状況になりつつあるというのは、岡本委員もおっしゃっていた計画が多すぎるという言葉に集約されるような感じかと思います。

嶋田議長:

例えば地域福祉計画と親和性のあることを図書館でやっているということもあるでしょうし、個別の計画も実は図書館とこんなところで繋がっているんですよということもおそらくあるのではないかと思います。厚生労働省で、健康21という健康寿命を維持するため平

均寿命を伸ばそうというような政策があって、そこに健康医療情報も少し絡みついていたことがあります。泉大津市立図書館の取り組みと、市における保健行政とが何らかの形でリンクしているでしょう。そういう意味で本当に森羅万象全方位的に、実は図書館ってこんなに町の取り組み、行政の施策、あるいは住民の皆さんの日々の生活に絡んでいるんだ。阿児委員の表現を借りると 2 次元的に見取り図が見えると、なるほど図書館って大事だなということになるような気がいたしました。

岡本委員:

私が連想したのは、大阪府立図書館が図書館を学ぶ総合講座を志茂田先生主催で結構長らくやられた。同じようなものを泉大津版的な形でやれるといいのかなというのは思いました。同時に嶋田議長が今まで言われたのも受けて言うと、別に図書館というテーマに縛る必要はないので、まさにその森羅万象を扱う様々な行政計画を紐解くような講座が月 1 回開催されていると、それは図書館としての戦略としても非常に良いと思います。健康福祉とか社会教育とか様々な政策ですね、観光政策とか各部署の部長部門の部長さんなり課長さんが、自分たちのところはこういうことを考えているっていうお話をしてくださるようなものが、2~3 年蓄積されるだけでも相当なものになりますしそれは結構なんていうか、市民の方にきちんとお伝えしていくべき話だと思うんですね。それをぜひこの場を使ってやるとかは、良いのではないかなと思いました。今日も図書館に来て最初に印象的なのは、エントランスのところにある様々な催し事が一覧になっているものなんですね。あれは非常にデザインも良くごちゃごちゃしてなくて、情報がコンパクトにまとまっていて良いと思うんですけど、あの中に常に一つ泉大津の今がわかる講座があったりすると良いのかなというのは思いました。お仕事を増やしすぎても困るので、何かをやめて何かを新しく足していくことが必要で、そういう入れ替えが、この際いい機会ですから、区切りになるところで、ちょっと構成を変えてみても良いのかなというのは、今までのお話を伺って思ったところ です。

嶋田議長:

新しい切り返しという意味でもいろんなご意見聞けてよかったと思います。

河瀬:

嶋田議長ありがとうございました。前回前々回と阿児委員に見取り図がわかりやすいとお話いただいたので、実は大阪府の子供の読書活動推進計画にその見取り図を入れるようにしました。綺麗にはまるかはわかりませんが、ただ今日ご発言を聞いて図書館という括りだけじゃなく、私はいつも市政を一番市民にわかりやすく伝える場所が図書館でありたいと思っているので、市のいろんな計画がどう絡まっていくかと関連して、市民の方とどう関わっているのかを解きほぐす場所になるのはすごくいいなと思いました。次は年度が

替わりまして、令和 8 年度の第 1 回の協議会をお願いしたいと思います。本日はお忙しい中ありがとうございました。